

# 突厥阿史那思摩系譜考

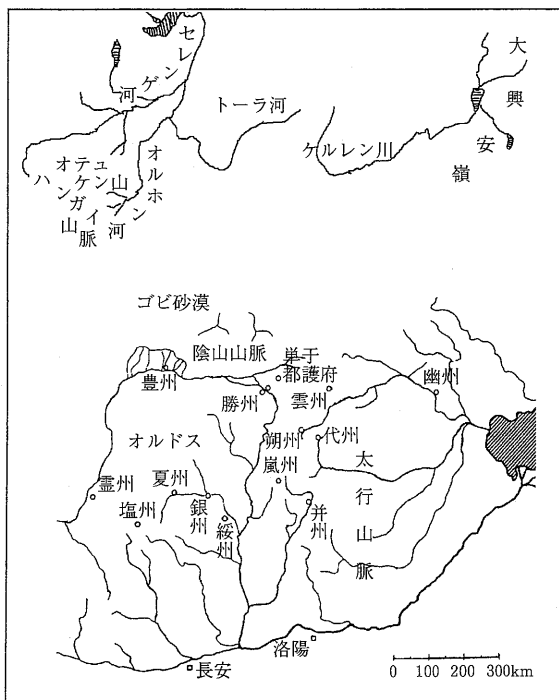
——突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集團——

鈴木 宏 節

はじめに

西暦六三〇（貞觀四）年、突厥第一可汗国（五五二—六三〇年）最後の可汗<sup>カガン</sup>qat'an、頡利可汗が唐朝に降った。ここに第一可汗国は瓦解し、突厥を構成していた諸集團中には、別のテュルク系遊牧勢力である薛延陀や西突厥に逃れるものもあったが、多くは亡国の民となつて陰山山脈南麓から黄河大屈曲部以北の地（現在の内蒙古自治区のパオトウからフフホト、ホリンゴル、山西省最北部にかけての地域）に、或いは黄河を南に越え河南オルドス（河套）地帯にまで押し寄せた。これに対して唐朝は臨時的な対応措置としてそこに羈縻州を設置し、既存の部族体制を温存・利用する羈縻支配を開始した〔C. 岩佐一九三六、石見一九九八〕。六三九（貞觀十三）年、特にオルドス地帯に居する突厥遺民を危険視した唐朝は阿史那思摩を可汗として冊立し、これらを黄河の北で統制をとるべく命じた。一度はオルドスから黄河を北に越えた思摩であったが、漠北モンゴリアの薛延陀による庄迫を受け、遺民の統制に失敗してしまう。六四三（貞觀十七）年、彼は遺民統制の使命を放棄し、黄河を南に越え、オルドスの勝州・夏州間に内徙

〔関連地図〕



譚其驤（主編）『中国歴史地図集』第五冊（上海、中国地図出版社、一九八二年）を参考に作製

することとなった。そのため唐朝は、六四〇年代後半の数年間をかけて、陰山山脈―黄河大屈曲部を中心に単于都護府による支配体制を整備し、突厥遺民全体を統制下に編入してゆく〔Cf. 石見一九九八〕。その後、六八〇年代初頭、この単于都護府体制下、唐朝に支配されていた突厥集団の中から第二可汗国（六八二頃―七四四年）の中核となる集団が勃興、独立し、陰山地帯からモンゴリアへと版図を拡大したことは周知の通りである〔Cf. 岩佐一九三六〕。

本稿で検討の中心となる阿史那思摩（五八三―六四七年）は、北朝・隋唐帝国に対峙した北アジアのテュルク系遊牧帝国突厥の君主たる可汗氏族の出身である。彼に関しては、略述した羈縻支配時代（六三〇―六八二年頃）における中原王朝唐の傀儡可汗、或いは蕃将としての側面が強調され〔Cf. 章一九八六、薛一九九二、しばしば唐代史の側

面から論ぜられてきた。その一方、突厥史の側面からは、専ら彼の出自について関心が集中していた。史料は以下のように伝える。<sup>(1)</sup>

〔A1〕 始畢・處羅(可汗)は其(思摩)の貌の胡人に似て突厥に類せざるを以て、阿史那の族類に非ざるを疑う。故に處羅・頡利(可汗)の代を歴て、常に夾畢特勤<sup>テギン</sup>たりて、終に兵を典<sup>つかさど</sup>る設<sup>シヤド</sup>たるを得ず。〔通典〕一九七、边防一三、突厥上(五四一五頁)／＼Cf. 旧唐書一九四上、突厥伝上(五一六三頁)

〔A2〕 始め啓民(可汗)の隋に奔るや、磧北の諸部は思摩を奉じて可汗と爲すも、啓民の歸國するや、乃ち可汗號を去る。性は開敏にして、善く占對すれば、始畢・處羅は皆な之を愛す。然るに貌の胡に似たるを以て、阿史那の種に非ざるを疑う。故に但<sup>た</sup>夾畢特勤<sup>テギン</sup>たるのみにして、設<sup>シヤド</sup>たるを得ず。〔新唐書〕二二五上、突厥伝上(六〇三九頁)

思摩は突厥において独占的に可汗を輩出する阿史那氏「護一九六七a、一〇頁」の人間でありながら、容貌が胡人(ソグド人)に似ていたため、阿史那氏としての血統を疑われ、第一可汗国末期(始畢、處羅、頡利可汗治世Ⅱ六〇九―六一九、六一九、六一九―六三〇年)に軍事権を有する設<sup>シヤド</sup>になれず、夾畢という形容語(語義不明)を冠する特勤<sup>テギン</sup>のままであったという。<sup>(2)</sup>まさにこの挿話によつて、テュルク系騎馬遊牧政權の突厥におけるイラン系外来民のソグド人という観点から、彼の存在に関心が寄せられてきたのである。

先ずプーリイブランク氏は、後の五代十国時代においてオルドス―山西地域にソグド人が出現する一因として、第一可汗国滅亡後、突厥遺民がそこへ南下、移住していた事実を挙げ、その前提として第一可汗国内部のソグド人

の存在を指摘した。中でも特に思摩に注目し、上掲史料から彼を両者の混血児とみなしている [Pulleyblank 1982, pp. 325-326]。

これを承けて護雅夫氏は、第一可汗国が多くのソグド人を支配下に組み込んでいたことを実証した。その際、史料A群を、思摩の両親のどちらがソグド人であったかという事実関係はともかく、可汗の宮廷やそれに近いところにまでも、彼らが浸透していた証左とみなし、突厥中枢部における彼らの存在を強調した [護一九六七b, 六八―六九頁]。

突厥内部におけるソグド人の存在・役割に関連して、つい最近では、ドゥゥラヴエシエル氏が、四―十世紀に中央ユーラシアの東西で活躍したソグド商人の姿を一冊にまとめた。突厥時代については、彼らと突厥人との提携によって実現した東西交易の役割を強調し、突厥庇護下に彼らが活躍する構図を *les milieux turco-sogdiens* [テュルク・ソグド世界] と呼称する [De La Vaissière 2002, pp. 196-254]。

森部豊氏は特に墓誌史料を積極的に利用して、唐末五代期の沙陀政権下で騎馬遊牧民族の生活様式を持つソグド人の存在形態を考察した。氏は彼らがそこに現れる遠因を、突厥時代に突厥から文化的或いは血縁的に影響を受けたことに求めている [森部二〇〇四a, 六一頁]。また八―十世紀に北・東北アジア (特に中国華北) 地域で生じた歴史事象に突厥・ソグド・沙陀の民族移動が深く関わっていたことを指摘し、第一可汗国の滅亡とその際の突厥遺民の南下を、安史の乱を契機として顕著に現れるようになるソグド系突厥人誕生の原点と位置付けた [森部二〇〇四b, 八〇―八一頁]。

このように先行研究を概観すると、単に突厥人とソグド人との関係という観点からのみならず、森部氏の如く、唐代の華北地域を遊牧民が活躍する草原世界の延長線上に位置付けようとする観点からも、思摩という存在は大いに注目されるべきである。しかし、ソグド人との関係上興味深い記録が残る彼を、或いは可汗に即位したとも伝えられる彼を、阿史那氏の系譜上どこに位置付けるのかという問題は解決されていない。従って彼の系譜を精確に確定することは、北アジアの古代テュルク民族史・突厥史研究の立場からも、近年の華北地域におけるソグド研究や唐末五代研究の進捗状況に鑑みても焦眉の急である。本稿は、以上の研究動向を踏まえつつ、十年來取り上げられることのなかった一墓誌史料を使用し、思摩をめぐる突厥第一可汗国の可汗系譜を再構成する。続いて羈縻支配時代の彼の事績を検討し、唐代のオルドス地帯における突厥集団の活動やその意義を明らかにしたい。

## 第一節 先行研究における阿史那思摩の系譜と墓誌史料

阿史那思摩には、羈縻支配時代に唐朝から傀儡可汗として冊立される以前のこととして、(A2) から知られるように可汗に即位したとの記録があった。当然、第一可汗国の可汗系譜に関わる議論中に彼を取り上げねばならないが、関連史料の僅少さを反映して、論考は決して多くはない。<sup>(3)</sup> 以下、従来利用されてきた史料B群を紹介し、主要先行研究を概観する。

(B1) 思摩は、頡利(可汗)の族人なり。〔通典〕一九七、边防一三、突厥上(五四一五頁) \ 〔旧唐書〕一九四上、突厥伝上(五一六三頁)

〔B2〕思摩は、頡利の族人なり。父は咄六設と曰う。〔新唐書〕二二五上、突厥伝上（六〇三九頁）

〔B3〕〔八月己卯、頡利可汗は〕乃ち突利と其の夾畢特勤の阿史那思摩とを遣し、世民に來見せしめ、和親を

請えば、世民は之を許す。思摩は頡利の從叔なり。〔資治通鑑〕一九一、高祖武德七（六二四）年（五九九二—

五九九三頁）

〔B4〕〔武德〕七（六二四）年、八月壬申、頡利可汗は其の從叔〔夾〕畢特勤の阿史那思摩を遣して來朝せし

む。〔冊府元龜〕九八〇、外臣部、通好（三九二頁）

第一可汗国の可汗系譜を検討した護氏は、〔B2〕に記録される思摩の父親の咄六設 *tolisgad*（テリスガシヤド）

という称号に注目した<sup>(5)</sup>。そして、後に莫何可汗となる処羅侯（頡利可汗の祖父）も、突利設 *tolisgad* であつたと史

料上確認できるため、この処羅侯と思摩の父親とを同一視し、系譜を以下のように復元した〔護一九六七d、三〇

六一三〇八頁〕。

〔護説〕 撰図（沙鉢略可汗）

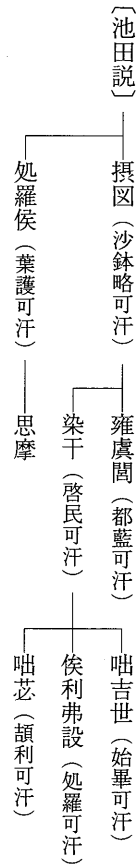
処羅侯（突利設・咄六設）

染干（啓民可汗）——咄苾（頡利可汗）

思摩（夾畢特勤）

この復元によれば思摩は頡利可汗にとって「從叔（基点となる人間の祖父の兄弟の子孫で、かつ基点となる人間より一世代上の男性親族）」ではなく、単なる「叔」となつてしまふ問題を残す。しかし、護氏は「從叔」の「從」の一字は衍字であると判断し、〔B3・4〕と他史料から導き出した系譜關係とを整合的に理解できるものとした。

池田知正氏は関連系譜を以下のように再構成した「池田二〇〇一、一二六一—一三〇、一三八頁」。



この復元によれば、思摩は確かに頡利可汗の「從叔」となり、史料B群のどの記述とも矛盾しない。その際の池田氏の議論の要点は、撰図（沙鉢略可汗）の息子を染干（啓民可汗）とすることであり、その蓋然性の高下が問われているものの、それを立証する史料については依然として議論の余地を残す。

ところが、上述の研究状況を新たに展開し得る資料が十年程前、長安近郊に位置する唐の太宗の陵墓から出土した石刻資料集である『昭陵碑石』（咸陽、三秦出版社、一九九三年）に公開されていた。それが「大唐故右武衛大將軍贈兵部尚書諡曰順李君墓誌銘并序」と題された阿史那思摩自身の墓誌（以下、阿史那思摩墓誌）である。李姓で題記されているのは、思摩に唐朝から賜姓されていたからで、このことは『通典』一九七、边防一三、突厥上（五四—五頁）に、羈縻支配時代、彼が唐朝に冊立された際の記録として「乃ち（河南の突厥を）河北に徙うつすさんとするに、右武侯、大將軍・化州都督・懷化郡王の思摩を立て乙彌泥孰俟利苾可汗と爲し、李氏を賜姓し、部する所を率ひきいて牙を河北に建てしめんとす」とあり、確認できる。<sup>(6)</sup>

『昭陵碑石』には、不鮮明な箇所が少なからず見られる拓本写真の他、繁体字の録文と簡単な註が掲載されている。<sup>(7)</sup> 誌石は縦横六十四cmの正方形、厚さは十三cm。文章は楷書で刻まれ、一行最大三十五字で、全三十四行から構成

成される。墓誌は一九九二年に醴泉県昭陵郷莊河村の西北で見つかった彼の墓中から出土し、墓誌蓋と李思摩碑も現存するという『昭陵碑石』一二—一三頁。彼が昭陵に陪葬されていた事実は『通典』、両『唐書』の突厥伝や『唐会要』等からも知られ、墓誌の存在が予想されていた。ただし、墓誌の記述を追跡し得る他史料への転載や彼の神道碑は存在せず、まさに待望の資料が出現したと言える。しかしながら管見の限り、この墓誌を利用した研究は未だ発表されていない。

先ず、墓誌の成立状況を点検しなければならない。以下に墓誌より、誌序の文末、即ち銘文の直前部分に記された彼の死に関する部分を示す。

〔C〕貞觀廿一（六四七）年、歲次丁未三月丁亥朔十六日壬寅を以て、遘疾して居德里の第に卒す。春秋六十有五なり。即ち其の年四月丁巳朔廿八日甲申を以て昭陵に窆むる。悼は宸衷を結び、哀は士庶を纏る。詔有り、兵部尚書・使持節都督夏銀綏三州諸軍〔事〕<sup>(9)</sup>・夏州刺史を贈り、餘官は故の如くせよ。〔中略〕其の子の左屯衛中郎將の李遮旬、痛は瘡拒を深くし、哀は風樹を纏る。敬しみて圓石を鐫ち、以て芳猷を紀す。乃ち銘を為りて曰く、〔後略〕『昭陵碑石』一二、一二二頁

墓誌の作成年代は、彼の埋葬された時期とほぼ重なると考えられ、没年の六四七（貞觀二十二年、四月の昭陵への陪葬の頃と推定できる。つまり墓誌テキストの成立年代は、従来彼の事績を伝えてきた『通典』や両『唐書』の成立年代より一世紀以上遡ることになり、本テキストは第一次史料として極めて価値が高い。残念ながら墓誌テキストの執筆者は記載されていないが、左屯衛中郎將として彼の息子「李遮旬」の名が明記されている。<sup>(10)</sup>墓誌テキ



ストの作成に彼が関与していたことは間違いない。息子の関与のもとに、墓誌銘が作成されたことに加え、可汗に連なる人物の墓誌であること、父系の血統を強調する墓誌テキストであることを考慮すれば、本墓誌に記される系譜関係や事績についての記述は、信頼を寄せ得るものと判断できる。

## 第二節 阿史那思摩の系譜の再構成

阿史那思摩墓誌の誌序にはその冒頭に、思摩本人から遡って、彼の父親、祖父、曾祖父までの記録が刻まれている。以下に、その該当部分を提示する。

〔D〕公、諱は思摩、本姓は阿史那氏、陰山の人なり。【中略】曾祖は伊力可汗なり。威は龍郷を攝<sup>す</sup>べ、道は狼望に高く、北のかた屈射を降し、東のかた颺脱を争う。祖は達拔可汗なり。屢<sup>しばしば</sup>蕭關を擾<sup>みだ</sup>し、頻<sup>しばしば</sup>に細柳を驚かし、空同に負<sup>よ</sup>りて驕子と稱し、昌海に阻<sup>よ</sup>りて全兵を擅<sup>は</sup>まにす。父は咄陸設なり。氣は大荔を陵<sup>よ</sup>ぎ、威は小月を加<sup>え</sup>え、功は左衽の域に宣べられ、績は氍毹の君に著<sup>あ</sup>わる。〔昭陵碑石〕一二、一二二頁〕

思摩の父親の咄陸設は〔B2〕の咄六設と符合しそうなものの、曾祖父の伊力可汗、祖父の達拔可汗の名は編纂史料上で見られず、それぞれ人物比定作業が必要である。

### 1 曾祖父——伊力可汗——

〔B3・4〕によれば、思摩は頡利可汗の従叔であった。従って思摩の曾祖父は頡利可汗にとって高祖父（四世

代前の先祖」ということになる。先行研究の成果から、頡利可汗を基点とした四世代前の可汗と言え、突厥の創始者である土門、伊利可汗が知られている〔護一九六七c、二三五頁／一九六七d、三〇八頁〕。復元中古音によれば、伊利は \*i.ɭi [GSR 604a, 519a] であり、〔D〕の伊力は \*i.ɭæk [GSR 604a, 928a] であるから、音韻上、両者は非常に近く、同一語を音写したものと判断できる。先ずは思摩の曾祖父は初代伊利可汗であったと決定することができる。

さらにこの伊力可汗という表記は、古代テュルク語 *ilig qayan* を音写したものとみなし得る点で重要である。護氏は、漢籍の伊利可汗が *ilig qayan* 「国家もてる可汗」の音写形であると推測した〔護一九六七a、一四、五四頁〕<sup>(11)</sup>が、「利」の中古音から伊利可汗を *il qayan* の音写形とする説もあった〔Pelliot 1929, pp. 210-211／劉一九七六、三一—三三頁〕。しかし伊力可汗という本表記例の出現により、初代突厥可汗がイルリグ・カガン *ilig qayan* を名乗っていたこと、編纂史料の伊利可汗という表記によっても *ilig qayan* を音写し得たことが立証され、突厥史において注目すべき成果が得られた。

## 2 祖父——達拔可汗——

第一節で概観したように、編纂史料に依拠した通説では思摩の父親は処羅侯とされてきた。そして、処羅侯の父親は乙息記可汗の科羅とされてきたので〔護一九六七c、二三五頁〕、思摩の祖父はこの乙息記可汗ということになっていた。しかし墓誌上で思摩の祖父は「達拔可汗」と記されており、直ちに通説に従って、これを乙息記可汗と同

一視することはできない。この達拔は、\*d'at b'wāt [GSR 271b, 276h]と復元される。今、思摩の曾祖父伊力可汗と達拔可汗の關係は父子であるということ(Ⅱ)を前提にできるので、編纂史料等から知り得る伊利可汗の息子達の中に達拔可汗の該当者を求めるべきである。

伊利可汗の息子は、乙息記可汗(科羅)の他、木杆可汗(俟斤、燕度)、他鉢可汗(『隋書』の佗鉢可汗・『周書』の頭可汗、阿史那庫頭<sup>(12)</sup>)、褥但可汗(步離可汗 [護一九六七c、二三八―二四三頁/Cf. 平田二〇〇四、一七頁])が知られる。このうち他(佗)鉢は \*t'a puat [GSR 4c(4h); Pulleyblank 1991, p. 40]と復元され、音韻上、達拔と非常に近い。

この他鉢可汗については、漢籍以外に一次史料が存在する。彼の名は、第一可汗国時代に成立したブグト碑文に記されている。ブグト碑文とは突厥の本拠地であるモンゴリアに残され、当時の突厥の公用語であったソグド語・ソグド文字で刻まれた碑文である「護一九九二、二二二―二四頁」。この碑文上の一語句はクリヤシュトルヌイ氏とリフシツ氏によって、ソグド文字で *by' t'sp'r y'n* と転写され「君主他鉢可汗」と解説されてきた [Krautrop, Han & Jirumun 1971, p. 129; Kijaštornyj & Livšic 1972, p. 73]。この人物比定・解釈は長らく多くの研究者によって採用され、他鉢可汗が「タスパル・カガン」と表音文字のソグド文字で記されていたことが通説となっていた。しかし近年、モンゴル国で碑文実見と新採拓本の検討を行った吉田氏はこれを *my' t'p'r x'n*「莫賀他鉢可汗」即ち「マガリタトパル・カガン」と読み換え、通説の修正案を世に問うた [森安・吉田一九九八、一四四―一四五頁、吉田・森安一九九九、一二二―一二三頁]。吉田氏の読みである「タトパル」は、まさに問題となつている「達拔」という漢字表記に対応する。ブグト碑文と阿史那思摩墓誌とは、この人物比定において相互に補完しあうのである。即

ち〔D〕に伝えられる思摩の祖父達抜可汗とは、ブグト碑文の伝えるタトパルカガンであり、それは編纂史料中の他鉢可汗であつた。

### 3. 父——咄陸設——

墓誌史料〔D〕には「咄陸設」と、編纂史料〔B<sub>2</sub>〕には「咄六設」とあつたが、陸と六は普通<sup>ニ</sup>「GSR 1032f, 1032a」<sup>13</sup>、墓誌でも編纂史料でも思摩の父親が「咄陸（六）設」であつた事實は揺るがない。先行研究において、思摩を阿史那氏の系譜上に位置付けてきた關鍵は、古代テュルク語の称号であるテリスシヤドを媒介にして、この咄六設を突利設（処羅侯）と同一人物とみなすことであつた。しかし、咄陸設は、左（東）翼長とも言い得る称号であり「護一九六七a、三四—三九頁」、その所持者が複数存在したことは十分想定される。例えば、西突厥初代可汗である室点蜜可汗の息子として咄陸設が知られている。それに加え、本稿のこれまでの考察から、思摩の祖父（他鉢可汗）は突利設（処羅侯）の父親（乙息記可汗）と別人物であつた。とすれば、咄陸設が突利設と同一人物であるという通説に拘泥することなく考察を進めるべきである。そこで、もう一箇所、墓誌上の記述を提示する。これは彼の先祖の記述に引き続いて彼自身の事績を伝える部分である。

〔E〕「公<sup>ニ</sup>思摩は」可汗の孫たるを以て、<sup>バルスリテギン<sup>(14)</sup></sup>波斯特勤を授けられ、<sup>にわか</sup>俄にして<sup>キニリユググ<sup>(15)</sup></sup>俱陸可汗に遷り、薛延陀（薛延陀・<sup>ウィグル</sup>迴紇・<sup>ウイグル</sup>暴骨（僕骨、僕固）・同羅等の部を統ぶ。後に啓民の破る所となり、隋室に拘えらる。煬帝は親ら其の縛を釋き、<sup>と</sup>賜物すること五百段、仍お蕃に還るを放す。<sup>かえ</sup>始畢可汗は公を用て伽苾特勤と爲す。始畢没して、頡利

可汗立つや、改めて羅失特勤を授けらる。ここにおいて軍謀密令は、並な公より出で、塞下に去來し、屢しば邊患を為す。【後略】〈昭陵碑石〉一二、一二二頁

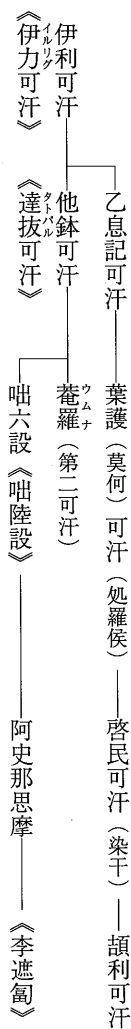
冒頭に思摩が「可汗の孫たるを以て、波斯特勤を授けられ」とある。着目すべきは、彼が最初に特勤テギンの称号を授与された縁起として、彼が「可汗の孫」であつたことを特記していることである。もし、通説の如く思摩の父親が突利設（処羅侯）であつたとすれば、突利設は葉護可汗（莫何可汗）にまでなっているから「護一九六七c、二四三頁」、彼の父親は可汗であつたと言わざるを得ない。その場合「可汗の孫」と記す墓誌の記載と齟齬を来す。「D」と「E」とを併せて、墓誌テキストを虚心坦懷に読解すれば、思摩の祖父は可汗カガンで、父親は設セテである。「D」は墓誌中、故人と先祖との繼承關係を話題にする要点であり、父親が、もし君主たる可汗であつたならば、それにもかかわらず殊更その下位の設であつたと記す必要性はないように思われる。念のため、拓本写真で碑面の「咄陸設」の箇所を観察してみたが、刻字に二文字必要な「可汗」を、一文字で済む「設」と彫り替えねばならぬほど、碑石面に余裕がないわけではない。墓誌資料に立脚する限り、思摩の父親は可汗ではない。つまり突利設（処羅侯）とみなすことは不可能である。以上から通説に反して、思摩の父親は処羅侯ではないと断言できる。

となれば彼の系図上の位置を探らねばならない。他鉢可汗の息子としては菴羅が知られているが、彼が咄陸設であつたという記録はない。一方で、彼は撰図に擁立されて可汗として即位しており、その後は第二可汗とも呼ばれている。<sup>(16)</sup>従つて、菴羅を思摩の父親とみなすことはできない。そこで筆者は新たに、この菴羅の兄弟として咄陸設を想定し、その息子が思摩であつたと推定する。前述の通り、咄陸テラスレーヤ設は称号で、所持者が複数存在しても差し支え

ないのである。

以上の考察結果を踏まえ、筆者が提案する関連系図が左図である。

〔関連系図——思摩に関わる部分のみ——〕 《 》内は墓誌上での表記



これを編纂史料上の記録と比較し、検証してみたい。先ず思摩の父が咄六設と記された〔B2〕については、六と陸が音通ということで解決した。次に〔B3・4〕によれば思摩は頡利可汗の「從叔」であった。新たに復元された上の系図からすると思摩は頡利可汗にとって「再從叔」ということになるが、これは編纂史料が「再」の文字を伝えなかったと考える。もとより墓誌史料だけを根拠にすることは戒めるべきであるが、一次史料を手がかりに各種史料を検討しつつ直系三代の人物比定を経て到達した結論である「再從叔」関係を、編纂史料が「從叔」と伝えているのであれば、編纂史料に節略があったと見るべきであろう。

本節では編纂史料の解釈の上で懸案であった思摩の系譜を復元することが出来た。併せて、伊利可汗、他鉢可汗の可汗名に関わる新知見を得た。次節では、本節の結果をもとに、より広範に第一可汗国の可汗系譜を視野に入れた考察を行う。

### 第三節 阿史那思摩の系譜より見た突厥第一可汗国の内部状況

史料A群によつて、思摩が阿史那氏の血統を疑われて設シヤドになれなかったことが指摘される〔Cf. 護一九六七d、三七頁〕が、これは彼が第一可汗国時代において可汗に即位していたこと（A2）と矛盾する。なぜなら可汗こそ阿史那氏の人間に限定されることが一般的に認められているし〔護一九六七a、一〇頁〕、設を帯びる者の血統的・系譜的資格が可汗を嗣ぐ者に準ずると判明しているからである〔護一九六七d、三七四頁〕。護氏は、彼の可汗即位について、（A2）に記録される彼の即位記事を疑い〔護一九六七c、二九七頁〕、思摩が即位していたとしても短期間のことであり、彼の可汗としての役割は全く果たされていなかったとする〔護一九六七d、三九七頁〕。これに対して、池田氏は、思摩を含む同時代の可汗の即位形式を比較し、彼も大可汗に即位していたと結論した〔池田二〇〇〇、一三五—一三七頁〕。筆者は別の角度から池田氏の見解を支持し、彼が可汗に即位していたとみなす。墓誌史料〔E〕に俱陸可汗キユリユクカガンとしての即位記事があり、彼が実際に可汗に即位していたことが複数の史料によつて補強されるからである。

思摩が可汗に登位した時期については、池田氏が（A2）を手がかりに、染干が隋朝に投降した時点とみなして五九七（開皇十七）年とした。そして、思摩が可汗位を放棄した時期を染干が隋朝から啓民可汗に拝された五九九年頃と見た〔池田二〇〇〇、一三三—一三三頁〕。しかし、染干の投降後、染干に続いて都藍可汗、達頭（步迦）可汗が即位していた〔Cf. 護一九六七c、二六八—二六九頁〕のだから、染干の投降後、直ちに思摩が即位したということ

はあり得ない。むしろ、六〇三（仁寿三年、達頭可汗が鉄勒諸部に背かれたため、逃亡した後、思摩が即位したと考えるべきである。〔E〕の記事は、思摩がウイグル・僕固・同羅等の九姓鉄勒諸部を支配していたと伝えており、彼が達頭可汗逃亡後の混乱時に国内の混乱を收拾するため即位していた証左になるだろう。

思摩の退位時期、即ち彼が啓民可汗に譲位した時期については、これを啓民可汗が思摩の支配した北方の鉄勒諸部等を併呑した『隋書』五一、長孫晟伝（一三三五頁）後のことと考えられるが、今のところ、いつ啓民可汗が漠南から漠北に勢力を伸張することができたのか、具体的な年代は不明である〔護一九六七c、二六八頁〕。

以上、思摩の可汗としての支配状況から、六〇三年を境に彼が可汗に即位していた蓋然性は高いと言える。思摩の在位期間は六〇三年の達頭可汗の逃亡後から、啓民可汗への譲位が行われた時点までとする。

次頁の「突厥第一可汗国可汗系図」は<sup>(17)</sup>、本稿のこれまでの考察結果を踏まえて復元したものである。<sup>(18)</sup>

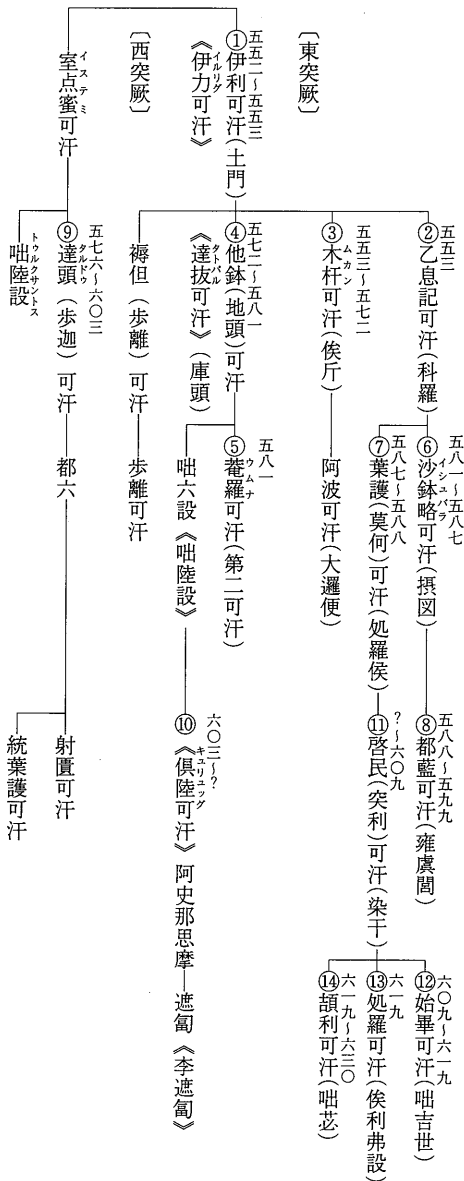
これを見ると、思摩は、彼の血統を疑った可汗達（始畢・処羅可汗）とは随分遠縁であったことが判明する。ここに、第二代乙息記可汗に由来し、第六代沙鉢略可汗以降は概ね親兄弟で可汗位を独占した乙息記可汗王家と、思摩の所属した他鉢可汗王家とが分立していた様子が読みとられる。史料A群の挿話が成立した背景として、当時の政権側である阿史那氏の中枢王家、啓民可汗の属する乙息記王家側に、他鉢可汗王家側の人間に対する対抗意識が存在していたのではないかと推測される。<sup>(19)</sup>

他鉢可汗王家は、他鉢可汗の後、息子の菴羅が可汗に即位する。この菴羅が他鉢可汗のために、阿史那氏の正統性を補強するために作らせた碑文がブグト碑文であった〔吉田二〇四b〕。ブグト碑文には、他鉢から菴羅への可



汗位の流れ、つまり他鉢可汗王家の正統性意識が込められていたと言えよう。また、この立碑事業が実現した状況として、菴羅可汗の周囲にも、立碑のためのソグド人スタッフが存在したことが予想される。とすれば兄弟である思摩の父・咄六設の周囲にもソグド人が存在していたに違いない。「C」には、思摩の息子の名前が「遮旬」と記されていた。遮旬の復元音は \*tšja b'jūk (b'ak) [GSR 804d, 933m] であり、筆者は遮旬を、七世紀頃のソグド諸

〔突厥第二可汗国可汗系図〕 西暦年は即位期間 ○内数字は大可汗の即位順 〈 〉内は阿史那思摩墓誌の表記



王の人名の一部に見られ、かつエフタル語起源とも考えられている *Canuk* チャムーク [吉田二〇〇四 a、一二七頁] の音写と判断する。このことは思摩の文化的背景を考える上で極めて興味深く、思摩の周囲にもソグド文化を共有する土壌が存したと言えよう。そもそも思摩がその身体にソグド人の血を宿していたことが突厥人に疑われた背景には、護氏が指摘するように、彼の周囲にソグド人が数多く存在することが前提となる [護一九六七 b、六八・六九頁]。第一可汗国時代においては、乙息記可汗王家の始畢可汗や頡利可汗をはじめ、都藍可汗などの下にもソグド人が存在していたと指摘されるが [護一九六七 b、六七頁]、他鉢王家の周辺にも彼らが存在していたのである。その後、本節で指摘したように思摩自身が即位したが、彼が啓民可汗に讓位してからは [A2・E]、この王家から可汗位継承者は出ず、乙息記王家が可汗位を独占してゆく。

それでは以上を踏まえて、改めて史料 A 群に伝えられた挿話の背景を検討する。第一可汗国時代末期の思摩の境遇を読み解くため、彼が帯びていた称号、特勤<sup>テギン</sup>に注目することにする。編纂史料 A 群では彼に夾畢特勤が授与されていた。一方、墓誌史料 [E] によれば、はじめに波斯特勤、次に始畢可汗の時代に伽苾特勤、頡利可汗の時代に羅失特勤が授与されていたことが判明する。このうち「伽苾」は編纂史料の「夾畢」にあたるだろう。伽苾は \**kiia b'jet* [Pulleyblank 1991, p. 253; GSR 405g] と、夾畢は \**kāp p'jet* [GSR 630a, 407a] とそれぞれ復元されるからである。処羅可汗時代 (六一九年のみ) の彼の特勤号がどのようなものであったかは不明であるが、少なくとも頡利可汗の即位に際して、思摩の称号が夾畢 (伽苾) 特勤から羅失特勤に改められていたとみなせる。

ところで、このように一人の人間に異なった形容語を冠する特勤号が可汗ごとに授与されていた突厥時代の記録

は従来、知られていなかった。突厥時代の特勤テギンは、単に古代テュルク語で「王子」という意味を持つ〔cf. ED, p. 88〕だけではなく、即ち、個人の呼称の一部をなしていただけではなく、可汗が任命する称号としての機能を備えていた。

いずれにせよ、思摩には称号として一貫して特勤が授けられており、設の授与が許されなかったという史料A群の記載が再確認できた。「A2」によれば、彼は始畢・処羅両可汗によつて寵愛を受けたと伝えられているが、逆に彼が特勤のままで設に任命されなかったことから、乙息記王家側の政治的な配慮が読みとられる。設は突厥領内に可汗とは別に所領を持ち、その牧民を支配するとともに、可汗と同等に軍事面で兵を司る権力が与えられてた点で、同じく阿史那氏出身者が称した特勤とは異なっており〔護一九六七d、三五八頁〕、軍政一致の遊牧政権では可汗に次ぐ地位を占めていたからである。

頡利可汗時代の特勤に関連して、以下の史料が存する。

〔F〕頡利の立つや、次弟を用ひて延陀テンダ設と爲し、延陀部を主らしめ、步利設もて霫部を主らしめ、統特勤トシテギンもて胡部を主らしめ、斛特勤もて斛薛部を主らしめ、(始畢可汗の息子の)突利可汗を以て契丹・靺鞨部を主らしむるに、牙を南のかた幽州に直るあたに樹たつれば、東方の衆は皆これな焉に屬す。〔新唐書〕二二五上、突厥伝上(六

〇三八頁)〕

頡利可汗は即位した当初、統特勤を任命して胡部(ソグド人集団)を統括させ、斛特勤を任命して斛薛部を統括させていた。この記録によつて、彼がソグド人集団を支配下に組み込んでいたことが既に指摘されている〔護一九

六七b、六三、八八—八九頁」。さらに、

〔G〕頡利は毎に諸胡に委任し、族類を疎遠にす。胡人は貪冒にして、性は翻覆を多くす。故を以て法令滋章にして、兵革歲動すれば、國人は之を患いて、諸部は攜貳す。〔通典〕一九七、边防一三、突厥上（五四—一頁）

とあり、頡利可汗のソグド人偏重が国を傾けた程であつたことがよく知られており、突厥人とソグド人との密接な関係が強調されている [Puleyblank 1952, p. 323 / 護一九六七b、六二頁]。しかし、思摩は、ソグド人との関わりもあつた他鉢王家出身であつたにもかかわらず、羅失特勤に任命されていた。<sup>(21)</sup> 頡利可汗の下で胡部を統括する統特勤には、彼とは別人がその任に就いていた。つまり思摩の政治的影響力を削ぐという政策は乙息記可汗王家によって一貫して実施されていたのである。

以上より、史料A群で思摩が阿史那氏の血統を持ち出され難詰された理由には、王家同士の競合、主導権争いという要素があつたと断言できる。始畢・処羅阿可汗の狙いは、一度は可汗に擁立された思摩が復位する可能性を摘み取ることにあつた。そのため彼らは思摩の阿史那氏としての血統を疑う言説を流布させた。血統について科学的な検証が不可能な当時にあつて、数代の可汗を輩出していた政権側の王家が持ち出した言説は、同時代の突厥にあつて相当な威力を発揮した違いはない。併せて彼らは思摩から軍勢力を剥ぎ取る目的で、彼を設に任命しなかつた。即ち思摩の血統を問題視する言説は、乙息記可汗王家によって形成された、突厥政権における彼の影響力を封ずるための一種のプロパガンダであつたのである。

#### 第四節 羈縻支配期の阿史那思摩と唐代オルドスの突厥集団

前節までは漠北時代の思摩を扱ったが、本節では突厥滅亡後、羈縻支配時代の彼の事績を検討の対象にする。頡利可汗をはじめ、長安生活を送る突厥王族がいた一方、はじめに述べた如く、思摩はオルドス地帯で実際に突厥遺民を統率しており、プーリイブランク氏が示唆したように〔Pulleyblank 1952, p. 325〕、七世紀以降の華北地域の民族動向を知る上で大変興味深い。

思摩は唐朝に帰服後、化州（夏州）都督に任命された<sup>(22)</sup>。六三三、四（貞觀七、八）年頃、オルドス地域は順・祐・化・長の四州都督府にまとめられ、六三九（貞觀十三）年の思摩の移動によりそれらが廃止されたと石見氏の指摘があり、<sup>(23)</sup>編纂史料で伝えられる化州都督の化州はこの四州の一つとみなせよう。化州は、例えば『旧唐書』によれば夏州都督府の項目にまとめられ「卷三八、地理一、夏州都督府（二四一三—二四一四頁）」、両者がほぼ同じ地域にあったことは間違いない。墓誌の夏州、編纂史料の化州という食い違いは当該時期、突厥遺民支配に際しての混乱によるものと思われる。いずれにせよ思摩は、唐朝への帰順後、オルドス中南部の化州・夏州と関わりを持っていた。では、彼とオルドス地帯との関係を追跡すべく、史料を提示する。これは、唐朝の命で黄河を北に渡ろうとする場面と配下の統率に失敗して以後の彼の事績とを伝えている。

〔H〕是に於て、禮部尚書・趙郡王の孝恭に命じて冊書を齎らし思摩の部落に就かしめ、壇を河上に築き以て之に拜し、並びに之に鼓纛を賜わしむ。突厥及び胡の諸州に在りて安置せらるるは、並な河北に渡り、其の舊

部に還しめんとす。【中略】「貞観」十七（六四三）年に至り、（思摩の下部衆は）相い率<sup>したが</sup>いて之（思摩）に叛すれば、「思摩は」南のかた河を渡り、勝・夏州の間に分處せられんことを請う。詔もて之を許す。【中略】「思摩は」未だ幾<sup>いく</sup>ばくならずして、京師に卒し、兵部尚書・夏州都督を贈られ、昭陵に陪葬せらる。墳を立つるに以て白道山を象<sup>なま</sup>どり、詔して化州に立碑せしむ。《通典》一九七、边防一三、突厥上（五四一六頁）

先ず「突厥」と並んで「胡（ソグド人）」が記されており、第一可汗国の崩壊に際して、オルドスにソグド人が到來していたこと、併せて思摩が率いた集団に彼らが含まれていたことが判明する。前節で第一可汗国時代、突厥におけるソグド人の広汎な存在が改めて確認されたが、彼らの中には突厥崩壊後、突厥遺民としてオルドスへ南下する者も現れ、思摩によつて統率された者も確かに存在していたのである。次いで麾下の統制に失敗した後、彼とともに突厥遺民集団は「勝・夏州の間」つまりオルドス地帯での生活を許されており、当地が突厥集団にとつて生活空間として通用していたことが強調される。勿論、その突厥集団中にはソグド人が少なからず含まれていたと推測される。そして長安で彼が没した後には、夏州都督（刺史）<sup>(25)</sup>が追贈され、昭陵に陪葬されているが、彼の記念碑が前述した羈糜州のひとつであった「化州」に立碑された。

羈糜支配時代の突厥集団を読み解く上で注目すべき資料として、思摩の妻の墓誌が挙げられる。<sup>(26)</sup>彼女の墓誌は「大唐故右武衛大將軍贈兵部尚書李思摩妻統毗伽可賀敦延隋墓誌并序」と題された、思摩のものとは独立したもので、「昭陵碑石」に思摩の墓誌と同様の体裁でテキストが掲載されている。誌石は縦横五十九cmの正方形、厚さは十・五cm。楷書で刻まれ、一行最大二十五字、全二十五行から構成される「昭陵碑石」一三、一一三―一一四頁。<sup>(27)</sup>こ

の墓誌上、彼女の出自と事績、死を伝える箇所を以下に提示する。

〔I〕夫人、姓は延陀、陰山の人なり。〔中略〕曾祖は莫賀噶頡筋バガリチヨルリイルキン、祖は莫汗達官ムカンリタルカン<sup>(28)</sup>、父は區利支達官グルカンなり。並な

英猷を襲い、咸な世職を能くす。〔中略〕貞觀三（六二九）年に逮および、匈奴中亂るれば、思摩は衆を率いて、因

りて歸朝す。預あらかじめじめ去就の機を識るは、抑おさそも亦た夫人の助なり。〔中略〕貞觀廿一（六四七）年八月十一日、

邁疾して夏州濡鹿輝の所に薨みまる。詔を奉じて思摩の塋に合葬す。〔後略〕〔昭陵碑石〕一三、一一三—一一四

頁

突厥滅亡時、唐朝へ帰順する際の彼女の功績が語られ、思摩とは第一可汗国崩壊以前に婚姻関係を結んでいたことが判る。彼女は、薛部とともに薛延陀を構成する延陀部の出身であった。彼女の曾祖父はその首長であり、祖父と父親はタルカンの称号を有していたと記載がある。このことは思摩が可汗に即位していた時期に薛延陀を治めていたという〔E〕の記述を想起させる。しかし、なにより注目すべきは、彼女の死についてである。思摩の没した同年の六四七年に夏州で死去したという（享年五十六、五九二年生）。〔C〕から思摩自身は長安で没したことが知られるが、妻が夏州にいたことは、遺民統率に失敗した後も彼が夏州地域とのつながりを維持し続けていたことを裏付けている。以上に見た思摩の後半生は、オルドスにおける突厥遺民集団の足跡とも言える。

このように思摩と関わりのあった夏州を含むオルドス地帯は、六八〇年代の第二可汗国勃興後も、突厥と関わりを持ち続けた。第二代默啜可汗は、陰山地域からオルドス地域の住民の帰趨等をめぐって唐朝と争ったことが知られる〔C〕。林一九八五、一一七—一二三頁〕。そして、当地は、北帰して独立した突厥遺民とは別に、そこに残った突

厥遺民の活動が顕著になる六胡州が設置された地であった。六胡州の位置は、史書では靈州から夏州地域とされ、現在のオルドス南部にもおよんでいたという見解がある〔森部二〇〇四a、六八一六九頁〕。古代テュルク語・突厥文字で記されたオルホン碑文（キョロヒサツ 闕特勤・ビルクニカガン 毗伽可汗碑文／七三二・七三五年成立）には *alci čub soydaq* と六胡州に居す「六州胡」の存在が記され、七〇二年、默啜麾下の突厥が当地に侵入していたことが知られる〔Kljasornyi 1961〕。また、七二四年には唐朝が六胡州で馬を購入したことが知られ、七二一年には六州胡の康待賓が「ヤン葉護」を自称して唐朝に叛乱し、続いて康願子は「可汗」を称して叛乱を企てた〔森部二〇〇四a、七二七三頁〕。

思摩と突厥遺民の活動に照らして、七世紀以降のオルドス地帯を見た際、そこが北方から突厥の遊牧民を受け入れただけでなく、北方に送り出した地域であったことにも気付かされる。先に指摘したように、当地は遊牧集団を収容し、温存する側面も有していた〔C. 石見一九九九〕。既に林俊雄氏によって突厥時代のオルドスから陰山地域が遊牧民の略奪・農耕・交易活動に関わる重要地域であったという指摘がされている〔林一九八五〕。併せ考えるならば、オルドス地帯は、唐朝の版図内にありながら、ユーラシア大陸を東西につらぬく、農業と遊牧文化が接触・融合・複合する農牧接壤地帯〔妹尾二〇〇一、三〇一三四頁〕の特徴を有していたのである。

### おわりに

本稿の考察結果は以下のようにまとめられよう。

- ①阿史那思摩墓誌を利用することにより、彼が伊利（伊力）可汗の曾孫、他鉢（タバ達拔）可汗の孫であることを考



定した。また、編纂史料に伝えられた思摩と頡利可汗との「従叔」という関係は、「再従叔」関係と修正される。それに伴い、②突厥第一可汗国の系譜を修正することができた「第三節、突厥第一可汗国可汗系図」。そして、③思摩が第一可汗国時代後半期を通じて冷遇されていたのは、彼の系譜上の位置にその原因があった。彼は他鉢可汗王家出身という背景を有していたが、一方、既に何代にも亘って政権を執っていた乙息記可汗王家側に常に警戒される立場にあった。この王家間の競合を背景に、一度は可汗に即位していた彼に、軍事権などが付与されなかったのである。そして、④唐朝に帰服した後の思摩は、オルドス中南部の夏州地域と密接な関わりがあった。彼が統率した突厥遺民中には第一可汗国に存したソグド人も含まれていた。七世紀以後、六州胡がオルドス地域で活躍する一因として、思摩がそこで統率した突厥遺民の存在を挙げられると改めて指摘できるのである。

北アジアの突厥史の問題関心に沿えば、本稿の系譜修正によって、第一可汗国の内情をより正確に把握する手がかりを得たことになる。筆者が指摘した王家の政治的分立状況はその一助となろう。近年、突厥史に限らず数多くの関連墓誌史料が発見、報告されているが、個々の情報はそれだけでは単なる点にとどまる。しかし、点の集積には既知の知見・編纂史料の理解を深化させる。筆者が試みた系譜復元の例がそれである。本稿では、未解決のものを含めて幾つかのカガンやシャド・テギン等の称号を指摘したが、それらの事例・人物例の蓄積は、人名同定や突厥碑文等での在証例との比較検討によって、突厥の制度・組織の理解につながる。それによって北アジア、中央ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル系の遊牧政権、遊牧型国家の実態解明にも迫ることができるはずである。次いで、はじめに述べた研究動向に即せば、阿史那思摩という人物がオルドス地域で突厥集団を率いていた意

義はより強調されるべきである。当地は、ユーラシア東部地域における農牧接壤地帯であり、唐代に限って鳥瞰しただけでも、本稿で検討した突厥集團の他、匈奴系の諸族、九姓鉄勒、吐谷渾、党項、沙陀といった諸集團が流入した。通時的に見れば、南匈奴や鮮卑系の諸集團からアルタン・ハーンのモンゴルに至るが如く、その時々歴史動向に影響を与えたことが知られる遊牧勢力の根拠地であった。中原王朝にとっても、草原遊牧勢力にとっても歴史上常に次代の原動力となる勢力を生み出し続けてきた地域である。かような地域に、突厥とともにその政權存立上不可欠なパートナーたるソグド人が見え隠れするのは、近年のソグド人の存在形態の再検討や本稿で明らかになった思摩の存在に照らしても、決して偶然ではないのである。第二可汗国が勃興したのはこのような歴史地理的背景を有した地域であり、今後、そのような視点からも突厥史を見直さねばならない。同時に、唐代全般期を通じて、ユーラシア視点から農牧接壤地帯をめぐる諸勢力の動向に更なる検討が試みられねばならないであろう。

## 註

- (1) 突厥伝については訳註研究があり、思摩の事績については「山田一九七二、一〇〇—一三、一六一—一六四頁 / Liu 1958, pp. 151-155, 203-206」を参照。なお、本稿で引用する史料において( )・[ ]は筆者が補った部分である。
- (2) シャド・sad (設、殺、察)とテギン・tegin / tegin / tigin (特勤、編纂史料ではしばしば「特勤」と誤記され

る)とは、突厥における称号・官職である。可汗と同様に、阿史那氏出身の者が称した「護一九六七d、三五八、三六五、三九五—三九六頁」。その他、阿史那氏出身の者が称する称号・官職としてヤブグ・yabgu (葉護)がある。

- (3) 岩佐氏は思摩を「頡利の族人」(後掲(B1))と、或いは「可汗親近の皇族」と判断した(岩佐一九三六、一三七頁)。岑仲勉、劉義棠氏も系譜關係を明示していない(岑一九五八、九九七頁 / 劉一九七六、四六、五八頁)。劉

茂才氏は突厥関連漢籍の訳註研究を発表し、その巻末に可汗系図を掲載するが、思摩に関して踏み込んだ史料批判までは行っていない。[Liu 1958, p. 152 及び巻末付録の系図 Stambau der Herrscher der Ost-Türkien]。

(4) 護氏の復元した可汗系図は通説となっている [Cf. 護一九六七c、一九六七d]。復元された突厥の可汗系図の全体像は「護一九七六、一〇一頁」で確認できる。

(5) テリス・ボイスとは突厥碑文中に在証される概念で、突厥領内の左翼(東翼)のことであり、右翼(西翼)タルドゥウシ・タルドゥスと対をなす「護一九六七a、三五―三九頁」。

(6) 墓誌中にも「貞觀三(六二九)年、匈奴の盡く滅するや、公は因りて入朝す。主上は其の適誠を嘉して、李氏を賜姓し、懷化郡王・右武衛大將軍に封ず」とあり「昭陵碑石」一一、一一二頁、彼に賜姓されたという記録が存する。

(7) 本稿では阿史那思摩墓誌のテキストとして『昭陵碑石』の拓本写真と録文とを使用する。以下の諸文献中にも録文が採録されるが、全て『昭陵碑石』に依拠したものである。『全唐文補遺』三、咸陽、三秦出版社、一九九六年、三三八―三三九頁、『全唐文新編』二〇、長春、吉林文史出版社、二〇〇〇年、一三八三五―一三八三六頁、『唐代墓誌

彙編統集』上海、上海古籍出版社、二〇〇一年、三八―三九頁。

(8) Cf. 『通典』Ⅱ後掲、第四節[H]／『旧唐書』(五一六五頁)／『新唐書』(六〇四〇頁)／『唐会要』一一、陪陵名位(四八二頁)。

(9) 拓本写真では墓誌面に「事」の一字が存在しないようだが、ここに「事」を補うべきことは明らかである。『昭陵碑石』一一、一一三頁。

(10) この李遮旬が、六七九(調露元)年、西域で唐朝に叛乱し、阿史那都支と共に捕縛された同名の人物と同一人物ではないかと『昭陵碑石』一一三頁に指摘がある。是非は判断しかねる。後考を期したい。なお、この遮旬については本稿第三節でも言及する。

(11) 古代テュルク語の *iling/eling* にいふは [ED, pp. 141-142] を参照。イルリク可汗をはじめ突厥・ウイグル可汗国の可汗名に関わる問題は [Rybatzki 2000] に詳しい。

(12) 平田氏の論考によって、長らく等閑視されてきた地頭可汗(阿史那庫頭)が他鉢可汗の即位前の別名であったことが実証された[平田二〇〇四、八一―二〇頁]。

(13) 後掲、第三節「突厥第一可汗国可汗系図」参照。この

咄陸設は、東ローマ史料 *Menandri Proctoris Frag-menta* にトゥルクサントス Tourxanhos と伝えられた人物である〔内藤一九八八、四〇二—四〇四頁〕。

- (14) ここでの波斯は古代テュルク語のバルス bars〔虎〕[ED, p. 368] の音写。

- (15) 俱陸の復元音は \*kiu liuk [GSR 121d, 1032f] であり、俱陸可汗は古代テュルク語 küliüg qazan「名声ある、榮譽ある、有名な可汗」の音写形である [cf. ED, pp. 717-718]。なお、東ウイグル可汗国時代の可汗号中にも構成要素として küliüg（俱録）が在証されている [cf. Rybatzki 2000, pp. 238, 241, 250-251]。

- (16) 菴羅はブグト碑文中にウムナ=カガン wmn' x'yn として登場する。そこには「マガ=ウムナ可汗を王位に就けた」との記載があり〔吉田・森安一九九九、一二四頁〕、彼の可汗即位が確認される。『隋書』八四、突厥伝（一八六—一八五頁）には、撰図の即位後のこととして「菴羅は降りて獨洛水に居し、第二可汗を稱す」と記録されている。ブグト碑文の建立の意義や菴羅の即位をめぐる問題については〔内藤二〇〇四、四一—四二頁〕を参照。

- (17) 西突厥の系図は〔内藤一九八八、二五六頁〕に依拠し、初期の主要人物のみを掲載した。

- (18) 「大可汗」と「小可汗」との差異について、護氏は形式的なもので実質的に区別が存在しないのが実状であったとの見解を提出した〔護一九六七c、二七三頁〕。それを承けて山田氏は、木杆可汗・他鉢可汗時代を通じて実質的にも形式的にも「大可汗」「小可汗」という表現が用いられていなかったことを証明している〔山田一九八九、八五頁〕。池田氏は都藍可汗（雍虞闐）時代から突厥人の語彙として「大可汗」が使用されたと指摘する〔池田二〇〇〇、一四〇頁〕。「大可汗」「小可汗」という用語を使用する際には注意が必要であるが、本稿では参照の便を考慮して、便宜的に大可汗即位順を示すことにする。

- (19) 本稿で提起された乙息記可汗王家と他鉢可汗王家との分立状況は、かつて山田氏が指摘した第一可汗国の後継者争いの背景としての「一族間の本家・分家意識」の存在を想起させる〔山田一九八九、八五—八六頁〕。

- (20) 称号要素の「統」は古代テュルク語 ton/tun の音写形と考えられ〔Кляшторный 1966, p. 204; 護一九七二、二二—二四頁〕、「第一の、最初の」という意味を有す [ED, p. 513]。

- (21) 羅失の語義は今のところ不明であるが、音韻上、羅失は \*la šet [GSR 6a, 402a] であり、統 ton/tun とは

大きく異なる。

(22) 『通典』や『旧唐書』、『新唐書』の突厥伝(五四一—五頁、五一六三頁、六〇三九頁)では思摩が「化州都督」として現れるが、墓誌には貞観十三(六三九)年以前のこととして「夏州都督」に任命されていたことが記されている。このような羈縻支配時代の史料上の混乱はしばしば見られるが、化州等の位置比定を含め、今後の検討課題である。

(23) 「石見一九九八、一二〇—一二三頁」参照。石見氏は、突厥滅亡に前後して夏州都督であった竇静がオルドスで遺民統治を担当したが、彼の一族は匈奴系費也頭種の紇豆陵氏を前身としていたことを指摘する。オルドスの民族状況を考える上で大変示唆的である。

(24) 思摩が唐朝から冊立された際の「突厥李思摩爲可汗制」にも「突厥及び胡の諸州に安置せらるるは、並な河を渡り其の舊部に還らしめよ」とあり(『唐大詔令集』一二八、商務印書館、六九—一六九二頁)、突厥とは別に「胡(ソグド人)」がオルドスに存在したことを伝える。

(25) 思摩への追贈については、墓誌史料の「C」では「夏州刺史」とあり、編纂史料での「夏州都督」とは異なっている[Cf. 『旧唐書』(五一六五頁)／『新唐書』(六〇四〇頁)]。

(26) 思摩の配偶者について、プーリイブランク氏は、昭武九姓の一つである康姓の一ソグド人女性を想定したが、史料の根拠が提示されておらず、従えなく[Pulleblank 1952, p. 340]。

(27) Cf. 『全唐文補遺』三、三三九—三四〇頁／『全唐文新編』二〇、一三八三七—一三八三八頁／『唐代墓誌彙編續集』四〇頁。

(28) イルキン・ркин(俟斤、頡筋)は、突厥のもと、イル・テベル・iläbär/eliäbär(俟利発、頡利発)を戴く集団よりは勢力の小さい集団の首長が帯びた称号である「護一九六七a、三九—四〇頁」。タルカン・tarkan(達官、達干)は、可汗の行政官が所持した称号である「護一九六七a、四六頁」。

#### 【史料】

『冊府元龜』Ⅱ『宋本冊府元龜』北京、中華書局影印本。

『隋書』・『通典』・『新唐書』・『旧唐書』・『資治通鑑』Ⅱ北京、中華書局標点本。

『唐会要』Ⅱ上海、上海古籍出版社標点本。

[略称・文献田録]

- De La Vaisière, É. 2002: *Histoire des marchands sogdiens*. (Bibliothèque de l'Institut des hautes études chinoises 32), Collège de France, Institut des hautes études chinoises, Paris.
- ED=G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.
- GSR=B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*. Stockholm, 1957.
- Kljaštornji, S. G. 1961: "Sur les colonies sogdiennes de la Haute Asie." *Ural-Altaische Jahrbücher* 33-1/2, pp. 94-97.
- Княшторный, С. Г. 1966: "Тоньюк — Ашиз Юаньчжэн." *Торкологический сборник* 1966, pp. 202-205.
- Княшторный, С. Г. & В. А. Лившиц 1971: "Согдийская надпись из Вугута." *Страны и народы Востока* 10, pp. 121-146.
- Kljaštornji, S. G. & V. A. Livšic 1972: "The Sogdian Inscription of Vugut Revised." *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 26-1, pp. 69-102.
- Liu Mau-tsai 1958: *Die chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken (T'u-Küe)*. 2 Bde., Wiesbaden.
- Pelliot, P. 1929: "Neuf notes sur des questions d'Asie Centrale." *T'oung Pao* 26, pp. 201-266.
- Pulleyblank, E. G. 1952: "A Sogdian Colony in Inner Mongolia." *T'oung Pao* 41, pp. 317-356.
- 1991: *Lexicon of reconstructed pronunciation in early Middle Chinese, late Middle Chinese, and early Mandarin*. Vancouver.
- Rybatzki, V. 2000: "Titles of Türk and Uigur Rulers in the Old Turkic Inscriptions." *Central Asiatic Journal* 44-2, pp. 205-292.
- 池田知正 二〇〇〇「六世紀末葉における突厥可汗の系譜と繼承」『東洋學報』八二・一・一五一—一四六頁。
- 岩佐精一郎 一九三六「突厥の復興に就いて」『岩佐精一郎遺稿』七七一—六七頁。
- 石見清裕 一九九八「唐の突厥遺民に対する措置」『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一〇九—一四七頁
- 〔初出「論集中国社会・制度・文化史の諸問題」中国書店、一九八七年〕。

護雅夫

一九六七『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社。  
一九六七a『突厥の国家構造』Ⅱ護一九六七、三一  
六〇頁「初出「突厥の国家」『古代史講座Ⅳ』学生  
社、一九六二年」。

一九六七b『東突厥国家内部におけるソグド人』Ⅱ  
護一九六七、六一—九三頁。

一九六七c『突厥第一帝国におけるcand号の研究』  
Ⅱ護一九六七、二二七—二九八頁「初出「東突  
厥官称号考序説」『東洋学報』三七—三、一九五四  
年」。

一九六七d『突厥第一帝国におけるcand号の研究』  
Ⅱ護一九六七、二九—三九七頁「初出「東突厥官  
称号考（一）」『史学雑誌』七〇—一、一九六一年、  
「東突厥官称号考（二）」『史学雑誌』七〇—二、一  
九六一年」。

一九七二（訳注）『西突厥伝（隋書・旧唐書・新唐  
書）』『騎馬民族史Ⅱ——正史北狄伝——』（東洋  
文庫二二三）、平凡社、一八九—二九八頁。  
一九七六『古代遊牧帝国』（中公新書四三七）、中  
央公論社。

一九九二「突厥可汗国内部におけるソグド人の役割

一九九九「ラティモアの辺境論と漢唐間の中国  
北辺」唐代史研究会（編）『東アジア史における  
国家と地域』汲古書院、二七八—二九九頁。

章韋 一九八六『唐代蕃將研究』臺北、聯經出版事業公司。  
岑仲勉 一九五八『突厥集史』上・下、北京、中華書局。  
妹尾達彦 二〇〇一『長安の都市計画』（講談社選書メチエ  
二二三）、講談社。

薛宗正 一九九二『突厥史』北京、中国社会科学出版社。  
内藤みどり 一九八八『西突厥史の研究』早稲田大学出版部。

二〇〇四「突厥・ソグド人の東ローマとの交流  
と狼伝説」『史観』一五〇、二九—五〇頁。  
林俊雄 一九八五「掠奪・農耕・交易から見た遊牧国家の発  
展——突厥の場合——」『東洋史研究』四四—一、  
一一〇—一三六頁。

平田陽一郎 二〇〇四「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政  
権」『東洋学報』八六—二、一—三四頁。  
森部豊 二〇〇四a「唐末五代の代北におけるソグド系突厥  
と沙陀」『東洋史研究』六二—四、六〇—九三頁。  
二〇〇四b「八—一〇世紀の華北における民族移動  
——突厥・ソグド・沙陀を事例として——」『唐代  
史研究』七、七八—一〇〇頁。

に関する一資料——ブクト碑文——」『古代トルコ民族史研究Ⅱ』山川出版社、二〇〇一—二一五頁「初出『史学雑誌』八一—二、一九七二年」。

森安孝夫・吉田豊 一九九八「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺蹟・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』一三、一二九—一七〇頁。

山田信夫 一九七二（訳注）『突厥伝（周書・隋書・北史・旧唐書・新唐書）』『騎馬民族史二——正史北狄伝——』（東洋文庫 二二三）、平凡社、二七一—八八頁。

一九八九「テュルク部族発展史覚書」『北アジア游牧民族史研究』東京大学出版会、七三—八六頁「初出『東方学会創立四十周年記念東方学論集』東方学会、一九八七年」。

吉田豊

二〇〇四 a 「Camuk の来源についての一考察」森安孝夫（責任編集）『中央アジア出土文物論叢』朋友書店、一二七—一三五頁。

二〇〇四 b 「モンゴル高原のソグド語碑文について」（二〇〇三年度内陸アジア史学会大会、講演・研究発表要旨）『内陸アジア史研究』一九、一二六頁。

吉田豊・森安孝夫

一九九九「ブクト碑文」森安孝夫・オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会、一二二—一二五頁。

劉義棠

一九七六「突厥可汗世系考」『國立政治大學邊政研究年報』七、二五—八二頁「再録『突回研究』臺北、經世書局、一九九〇年、一一六—六頁」。